

本校中学部の弁論大会について、西日本新聞朝刊で取り上げられました。

(第3種郵便物認可)

2

障害への理解 弁論で広げ

久留米聴覚特別支援学校 30年超 発表継続



手話と言葉で弁論を披露する久留米聴覚特別支援学校の生徒

自分の障害と向き合い、成長してほしい。教員たちがそんな願いを込めた弁論大会が、久留米市の久留米聴覚特別支援学校で、30年以上前から開かれている。20年ほど前からは、聴者と一緒に市や県の大会に出場し、障害に対する社会の理解を少しずつ広げてきた。

市、県大会でも実績 思い工夫し伝える

1月29日。中学部の14人が自身の障害や生活の中で感じた思いを題材に、3〜5分程度の弁論を披露した。壇上のスクリーンに文章を映し、手話と口話で原稿を伝え、誰もが理解できるように工夫している。生徒は緊張した表情で登壇。「人工内耳を付けている自分と付けていない自分、どちらが本当の自分？」「軽度難聴のため、聞こえていると勘違いされる」。それぞれの心情を訴えた。出番を終えた生徒に教員が「あなたらしい声が出たね」と声を掛けると、照れたようにほほ笑む場面も。

教員らの審査で今回、最優秀賞に選ばれたのは、姉と比較され苦しんだ経験を綴った1年の鷹尾みれいさんの「姉妹だけど」。一人と違うことをばかにしたり、差別したりしてはいけないと伝えていきたい」とと会場に語り掛けた。学校によると、手話を中心に生活する聴覚障害の生徒には、文章が苦手なケースもあるという。特に苦労

するのは助詞。手話は書き言葉と一致しない部分もあり、助詞のように単体では意味をなさない言葉の認識が苦手な傾向がある。単音の助詞は、補聴器や人工内耳でも聞き漏らすことがあるという。このため、生徒と教員がやりとりを重ね、原稿を練っている。

生徒はこれまで、県の大大会で優秀賞に輝くなど実績を残してきた。今回も生徒の1人が市大会に出場する予定だ。

野村健二教頭によると、以前は市や県の大会にスクリーンは設置されておらず、学校が会場に備品を持ち込んで対応していた。5年ほど前から、出場する全生徒の弁論がスクリーンに映し出されるようになった。障害に対する理解は近年、深まりつつあるという。野村教頭は「大会出場が障害への理解を深めてもらうきっかけになっている」と確信する。

(玉置采也加)